

今後30年についての私見:

慶應大学経済学部 田中辰雄

(1) 与件と論争ポイント

今後30年では変わらない与件として考えるべき点

- (1)人間は常に個別性と共同性を求める。(人間の性質についての与件)
- (2)ネットのブロードバンド化、CPUの高速化がすすむ。(技術進歩についての与件)
- (3)東アジアでは国家主権は弱まらない。(国際システムについての与件)

今後30年で変わるかもしれない点:重要な論争ポイント

- (i)オタク(繭化)は淘汰されて消える人間類型か、それとも定着する人間類型か。
- (ii)財政・年金は破綻せず切り抜かれるか(関連:経済成長率は再び高まるか)。
- (iii)少子化・人口減少は逆転するか。

#少子化による人口減少を与件とする人がいますが、私は逆転の可能性ありと見えています。年金財政の破綻も与件であるかのようにいう人がいますが、これも与件ではないと思います。

(2) 4つの分類枠のどこが実現するか。

(a)

「市場にまかせておけばよい。以上」

これが私の基本スタンスです。

事務局からは「自分として4つのうちどれを望むかを決めてから」という注文でした。しかし、私自身としての希望はありません。私は、人々の望む方向を見出し、それに向かう障害を取り除く(あるいは人々の判断の材料を提供する)のが社会分析に携わる者の仕事であると考えています。よって、正直に言えば自分として4つのうちどれが良いかという意見はありません。

しかし、これでは話になりませんので、人々の望みがどう変化していきだろうかについて私なりの「予想」を話してみたいと思います。結論は事務局案で言うジェットコースターシナリオに近くなります。

(b)

その1:第一の軸 エネルギー多消費(成長経済)                      エネルギー小消費(成熟経済)

ここでエネルギー多消費かどうかの軸は、言い換えると経済成長にもどるかどうかの軸である。省資源努力は、経済成長しようがしまいがいずれにせよ行われるから(程度の差はあるにせよ)、二つを分ける基準にはならない。つまり省資源努力するかしないかは、軸の本質ではない。結果としてのエネルギー消費量の多少の大半は、実は成長率で決まってしまう。したがって、事務局の用意したエネルギー多消費か否かの軸は、経済成長に戻るかどうかの軸と解釈しておく。具体的には、成長経済とは一人当たり所得の伸びが2～3%程度で、成熟経済とは0～1%であるとしておく。

そう考えた場合、成熟経済(言い換えれば低成長)が今後もずっと続くことはありえないと予想する。

その第一の理由は、産業化の潜在力はまだ刈りつくされていないからである。技術革新の可能性は、情報通信技術から、ロボット、ナノテク、そしてバイオとフロンティアを広げてきており、いまだ収束の兆しは無い。ロボット、ナノテク・バイオは今度巨大な産業を形成する可能性がある。

第二に、人々が産業化の潜在力に魅力を感じ続けている。しばしば環境や福祉など第三の生活スタイル(スローライフ)に話題が集まるが、だからといって成長に否定的になっているわけではない。このような「反産業化」型の話が日本より浸透しているヨーロッパ諸国が、成長に後ろ向きになっているわけではない点に注意すべきである。たとえば北欧諸国も経済成長に注意を払っている。日本におけるスローライフの流行は団塊の世代がリタイア時期にあたっているというタイミングの問題が働いており、その底は深くない。

第三に、先行例を見ると、このような成熟経済観は一種の呪縛であり、それが続いた例は多くは無い。イギリスや北欧諸国はいったんは低成長に陥ったことがあるが、最近では復活しつつある。低成長を成熟と読み替えて受け入れようという姿勢は、一時的に過ぎない現象を調的に趨勢と見なす誤りを犯しているのではないか。

第四に、最後に日本の現在の低成長は金融部門とIT部門の失敗と、規制部門の不効率によるところが大きい。自動車産業は依然として世界最強であり、機械産業も競争力を失っていない。IT部門の失敗はIT産業の構造変化(モジュール化の終焉・IT機器の家電化)によって日本企業に復活の芽が出てきた。

以上の理由をもって、成熟経済という名前の低成長に移行するというシナリオは現実的ではなく、再び経済成長の経路に戻ると予想したい。

(c)

その2: 繭化          ノード化

ここで繭化はオタク化と読み替えられる。この問題は繭化(オタク)が社会的に存続可能な類型かどうかにかかっている。私は、繭化は一定の範囲内にとどまり、その拡大にはどこかでブレーキがかかると予想する。

繭化を支えている要因はいろいろあろうが、外面的には親の資産(資金源)とコンビニ(物理的資材供給源)とパソコン&ネット(情報供給源)の3点セットが重要である。この3点セットはこれからも存在し続けていこう(親の資産が尽きる説があるが、遺産としてもらって食いつぶせば当面30年くらいはいける)。この面からは、歯止めはかからない。

私が歯止めがかかると考えるのは、彼らが決して幸福とは言えないからである。30歳を過ぎるころから彼らは壁につきあたりはじめる。結婚もせず、安定した職にもつせず、一人で生活することのむなしさに襲われはじめる。そしてそれを後に続く世代が見ている。後に続く世代はどこかで軌道修正をはかろうとするだろう。繭化にはどこかでブレーキがかかると予想したい。ただし、繭化は消えるわけではない。繭化には特定領域での知識・技

能の蓄積や、個人世界の熟成などの効果があり、それは一定の成果を当人と社会にもたらすからである。繭化は社会のなかの通過儀礼あるいは一部の人の特殊技能として存続する(コミケはどこかで卒業し、現実に戻っていく)

全体の予想としてはノード化となる。ただし、ノード化と言っても興味関心は身の回りのことなどが中心で、グローバルに意識拡大が図られるわけではないだろう。SNS のように日常の生活世界の自然な拡大のような形が大勢であるだろう。

(d)

以上をまとめると私の予想は以下のようなになる。

